

『聖書 新共同訳』 アラム語部分の翻訳批評 (2)

守屋 彰 夫

承前

前稿で創世記, エレミヤ書, エズラ記のアラム語部分の翻訳批評を試みたので¹⁾, 今回は残るダニエル書アラム語部分 (2章4節 b-7章28節) の翻訳批評を行う。前回同様, 原文と日本語文との比較により, 翻訳の正確さの検討を主眼とする。

ダニ 2:4

“王様がとこしえまでも生き永らえられますように。”

この“王様が”は文法的には呼格として機能しているので口語訳のように「王よ,」と呼びかけにする方が正確であろう。ただし, どちらにしてもあまり意味の差はなく, 翻訳者の工夫ならば, 容認されよう。しかし, 直接的呼びかけを避け, 3人称的表現を採用したのならば, 動詞部分 (命令形) は口語訳を踏襲せず, 〈生き永らえますように〉で十分なのではないだろうか。

ダニ 2:5aa

“王は賢者たちに答えた。”

これも意識的に変更したのかどうかは不明だが, 口語訳のように「王は答えてカルデヤびとに言った」とする方が, 原文の二つの動詞使用に対応している。「カルデヤびと」を“賢者”とするのは一つの解釈だが, 意味を限定しすぎる危険は別にして, この方が読者には親切かも知れない。

ダニ 2:5aβ

“いいか、わたしの命令は絶対だ。”

原文はペルシア語からの借用語 'zdā を含む表現で直訳すると、〈命令が私から発せられる/られている〉とでもなろうか。この文はこの時代のアラム語独特の表現である。文脈を見ると命令の内容が以下に続くので、〈私は（以下の）命令を下す〉位はどうだろうか。文語訳の「我すでに命を出せり」は正確な訳といえるが、口語訳「わたしの言うことは必ず行う」同様、新共同訳も原文から飛躍しすぎている感が否めない。英訳 RSV “The word from me is sure” の影響だろうか。

ダニ 2:5ba

“もしお前たちがわたしの見た夢を言い当て、その解釈をしてくれなければ、”

ここは“言い当て……(解釈を) してくれなければ”と日本語に二つの動詞が使用されているが原文では動詞は一つ。機械的に良し悪しは言えないが、口語訳の「あなたがたがもしその夢と、その解き明かしを、わたしに示さないならば」で十分原語に忠実な訳となっているので、無理に構文を変える理由はないだろう。2:5aa では原文の二つの動詞を一つの動詞に、同一節のここでは逆に一つの動詞を二つの動詞に訳すというのは何か特別な正当な理由があるのだろうか。

ダニ 2:5bβ

“お前たちの体を八つ裂きにし、お前たちの家も打ち壊す。”

条件節に続く帰結文。1人称に訳されているが、王が怒りにまかせて直接手を下すという意味では勿論ない。これも口語訳「あなたがたの身は切り裂かれ、あなたがたの家は滅ぼされる。」と比べてみれば明らかなように、原文の受動形を忠実に再現した方が、王の命令が厳格に執行されるというニュアンスがよく伝わる。この帰結文の後半は文語訳「汝らの家は厠かはやにせられん。」

が一番直訳に近い。意味は取り壊し、ないし、財産没収のことであろう。

ダニ 2:6aα

“しかし、もしわたしの見た夢を言い当て、正しく解釈してくれれば”

ここは 2:5ba と同じ構文だが肯定の条件文。2:5ba とは異なる動詞が使われているが、とにかく動詞は一つなのだから、冗長な訳と言えよう。

ダニ 2:6aβ

“ほうびとして贈り物と大いなる名誉を授けよう。”

ここは“ほうび”、“贈り物”、“大いなる名誉”の三語が並列して出てくる。前二者の意味領域の区分は必ずしも明瞭ではないが、三つを二つに減じて後の二つを“ほうび”の内容とするのは疑問。口語訳「贈り物と報酬と大いなる栄誉を、わたしから受けるだろう。」は適切な訳と言えよう。動詞部分も 2 人称複数形で口語訳「(あなたがたは)わたしから受けるだろう」が正確で、1 人称に変更した理由が不明。「授ける」と「受ける」は同じ事態の見方の相違と言えなくもないが、例えば英語で You will receive it from me を「私はそれをあなたにあげます。」と「あげる」私を強調して訳すようなもので奇妙。更に付言すれば、王の意志は 1 人称で表現しない方がこの時代の言い方としては普通(既述のダニ 2:5aβ の批判を参照)なのだから、人称と動詞を敢えて変更する理由は全くないだろう。

ダニ 2:6b (訳は省略)

2:6aα と同じ批判が当てはまる。

ダニ 2:7a

“彼らは繰り返し答えた。”

ここでの“繰り返し”も口語訳の「再び」の方が誤解が生じない訳だろう。動詞については 2:5aα の批判を参照。

ダニ 2:7b

“王様、どうぞその夢をお聞かせください。僕らはその解釈をいたしましよ
う。”

前半の原文は王に直接 2 人称で要求するのではなく、王は 3 人称で言及される。〈王様はその僕らにその夢を語り聞かせられますように〉とでもなるか。後半は口語訳「そうすればわたしたちはその解き明かしを示しましょう」が原文の動詞（1 人称複数）の訳として正確。新共同訳は前半の「彼（王）の僕らに」（前置詞つき）の「僕ら」を後半の主語にして構文を全く変更している。

ダニ 2:8aβ-9a

“思ったとおりだ。わたしの命令が必ず実行されることを知っているの
で、時間を稼ごうとしているのだ。⁹その夢を話して聞かせることができな
ければ、お前たちに下される判決は今言ったとおりだ。だから、わたしの前
でうそをついたり、いいかげんなことを述べ立てたりして、わたしの考え
が変わるまで時を稼ごうとしているにちがいない。”

これまでも多くの箇所指摘してきたように、新共同訳は原文の構文を全
くと言っていいほど無視して訳している場合が少からずあった。平易で達意
な日本語訳を提供しようとする時、それも必要な場合もあろう。しかし、教
会の礼拝でも使用されることを念頭に置いた時、やはり自らある程度の制約
があることを自覚して行うべきであろう。聖書はマソラ学者によって句読法
まで含めて厳格な統制の下に伝承されてきたことを考慮するなら、変更する
場合はよほどの根拠が必要となる。以上筆者なりの基準に基づいて、当該箇
所を読む時、何故こうまで原文の構文をずたずたにしてしまったのか、理解
に苦しむ。

先ず 8aβ を口語訳に基づいて直訳すれば、〈あなたがたが時を延ばそうと
しているのを、わたしは確かに知っている。〉となる。「知っている」の主語
は王であり、王が知っている内容は、“わたしの命令が必ず実行されること”

ではなく、〈お前たちが時を稼ごうとしていること〉である。8b 冒頭の複合接読詞 *kol-q^obēl di* は通常、理由、情況、時の接読詞として理解されている。それに従って訳せば、8aβ-b 全体は、〈お前たちは命令が私から発せられていることがわかっているので、(お前たちは) 時を稼ごうとしていることが私にはわかっている。〉となろう。これで9節から新しい文が始まれば何ら問題は生じないのだが、残念ながら、9節は冒頭に接続詞 *di* があって、9節全体が8節と何らかの形でつながっている。この構文上のつながり方の理解は一樣ではないが、少なくとも新共同訳(口語訳も同様)のように8節と9節を切り離してしまうのは、9節冒頭の接読詞ないし関係詞の *di* を全く無視してしまっていることになる。どのような解決法があるだろうか。

いくつかの英訳聖書を見てみよう。

"I know with certainty that you are trying to gain time, because you see that the word from me is sure ⁹that if you do not make the dream known to me, there is but one sentence for you. You have agreed to speak lying and corrupt words before me till the times change." (RSV)

"It is clear to me that you are playing for time, since you see that I have decreed ⁹that if you do not make the dream known to me, there is but one verdict for you. You have conspired to tell me something false and fraudulent until circumstances change." (*Tanakh*)

"I know for certain that you are bargaining for time, inasmuch as you have seen that the command from me is firm, ⁹that if you do not make the dream known to me, there is only one decree for you. For you have agreed together to speak lying and corrupt words before me until the situation is changed." (*New American Standard Bible*, Chicago, Moody Press)

それぞれ微妙な差はあるがいずれを見ても、8節で完結させてしまう新共

同訳の構文理解が際立って特異なものであることがわかる。9節冒頭の *dī* は、関係代名詞として理解され、8節の王の命令の内容を示すものとされていることがわかる。すなわち、複合接続詞 *kol-q^obēl dī* はその前の文につながるよりも、後の文との関係がより強く理解されている。又、最近、複合接続詞 *kol-q^obēl dī* の包括的な研究を行った J. W. Wesselius もこの点を強く主張している²⁾。因みに彼の訳を掲げると、

“I know with certainty that you are trying to gain time. For this reason you have seen that the word from me is sure that if you do not make the dream known to me, there is but one sentence for you, because you had agreed to speak lying and corrupt words before me till the times would change.”³⁾

Wesselius 論文にみられるように、複合接続詞 *kol-q^obēl dī* 以下と全体の構文を如何に整合的に理解するかの議論がこれだけ徹底して行われている中で、新共同訳は原文の構造に全くと言っていい程頓着しないのは何故だろうか。理解に苦しむ。ダニエル書 2-6 章（アラム語）部分にはこの複合接続詞 *kol-q^obēl dī* が 20 回使用されているので、出てきたところでできるだけ訳文の検討をしていきたい。

構文のほかに、不正確な訳を指摘しておきたい。9節前半の“お前たちに下される判決は今言ったとおりだ。”も原文から余りにかけ離れすぎている。口語訳の「あなたがたの受ける刑罰はただ一つあるのみだ。」は、文語訳同様忠実な訳と言える。9節前半の終わりの“わたしの考えが変わるまで時を稼ごうとしているにちがいない”も、直訳してみると、〈時が変わるまで〉で、この節は、その前にある動詞句、〈虚言やでたらめを私の前で語るようお前たちは結託しているのだ〉につながる。〈お前たちは結託している〉と訳した動詞 *hizmintûn* は新共同訳では脱落している。

ダニ 2:10aβ-b

“王様のお求めに応じることのできる者は、この地上にはおりません。大王

や支配者の中のだれも、そのようなことを占い師、祈祷師、賢者に求めたことはございません。”

ここもこの節の前半と後半の間にある *kol-q^obēl di* が全く顧慮されず、両者が独立した二つの文に訳されている箇所。先に引用した英訳 (*RSV, Tanakh, NASB*) は後半を理由とみて、“for” や “inasmuch as” で後半を導入する。Wesselius はこの複合接続詞に関する彼独自の理解に基づき、*kol-q^obēl di* の前の文とのつながりよりも後続する文とのつながりを重視するので、11 節までをも含めて、一つながりと取っている⁴⁾。

ダニ 2:11

“王様のお求めになることは難しく、これに応じることのできるのは、人間と住まいを共になさらぬ神々だけでございましょう。”

11 節は接続詞 *ū* で導入される。この存在が Wesselius の主張の根拠ともなっているが、この問題はこれ以上追求しない。ただ 10 節以下の賢者たちの答え方のレトリックに関して言うと、10 節で“王様のお求めに応じることのできる者は、この地上には〈一人も〉おりません”という発言とこの 11 節の発言は相応じており、そのことを考慮すると 11 節後半部は〈……応じることのできる者は、……神々を除いてはほかに誰もおりません。〉と原文の *lā' 'itai……lāhēn* を忠実に再現した方が、文体上まとまりがよいのではないだろうか。勿論、「神々だけができる」という表現が「人間にはできない」と論理上つながることに異論はないが、原文の持つ論理、文体に対して、日本語表現が犠牲にならない程度には多少とも顧慮する必要があるように思われる。

ダニ 2:12 訳文省略

この 12 節冒頭には *kol-q^obēl d'nā* があって、12 節までの賢者たちの答えに対する王の反応への論理的接続が明示されている。新共同訳はこの複合語を全く無視して訳出せず、11 節と 12 節の論理的つながりを読者に委ねてい

る。ここではそのつながりは容易に想像できる（王の期待に反する答え→王の怒り）が、しかし、無視してよいとは思えない。口語訳「これによって」、RSV と NASB “Because of this,” Tanakh “Whereupon” 参照。

他にもこの複合語 *kol-q^obēl d^enā* が使用されているのでそれらの箇所をここで検討しておきたい。ダニ 2:24 “そこで”，ダニ 3:7 “それで”，ダニ 3:8 “さてこのとき”（ダニ 3:22 は後に言及），と一応それぞれの文脈に即して訳し分けられている。しかし，ダニ 6:10 ではこのこと同様全く無視されている。文脈としては，王の臣下たちの讒言が直接話法で導入された後で，王の反応が語られる場面だから 2:10 と同じ条件と言えよう。従って全く脱落させてしまうのは如何にも恣意的な感じがする。

ダニ 2:13

“知者を処刑する定めが出されたので，人々はダニエルとその同僚をも殺そうとして探した。”

ここは恐らく文脈を考えて，“ダニエルとその同僚をも”（傍点筆者）としたのだろうが，原文には“も”がない。動詞の時制をも考慮して私訳を試みると，〈そして布告が出され（完了形），〔その〕知者たち（規定態）は殺されることになった（分詞）。そこで彼らはダニエルとその同僚らが処刑されるよう（受動不定詞），探し求めた。〉となる。最後の部分は 3 人称複数形 *ab^{ec}ō* を受動的意味に取り，〈ダニエルとその同僚らは，処刑されるために探し求められた。〉とすることも可能。

ダニ 2:14-15aα

“バビロンの知者を殺そうと出てきた侍従長アルヨクにダニエルは思慮深く賢明に應對し，¹⁵この王の高官アルヨクに尋ねた。”

14 節も冒頭に複合副詞句 *bē'dain* があり，物語りの新しい段階の始まりが明示されている。この複合副詞句はダニエル書で 26 回使用されているが，大抵は無視されて，訳出されていない。例外を挙げると 2:46, 3:13, 5:29

の三箇所で“これを聞いた”，3:30で“こうして”，5:3, 13で“そこで”，6:17で“それで”となる（5:24と7:11については当該箇所と言及する）。つまり単純な形では26回中7回だけが訳出され，他は訳出されていないのである。文脈から読者に流れを理解させるという考えも成り立つかも知れないが，原文にある文脈を明示する語句は可能な限り，つながりを明示して訳出する方が親切ではないだろうか。前置詞 *be* のない *'dain* も同様に頻出するが，訳出されていない場合が可成りある。

ダニ 2:15aβ

“どうして王様はこのような厳しい命令を出されたのですか。”

ここでは翻訳の問題ではなく，語義の解釈について触れる。“厳しい”と訳された語の語根 *hsp* はことダニ 3:22 で使用されている。頻度が少なく，同時代のアラム語文献にも現れないので，文脈に頼らざるを得ないのだが，二通りの解釈が可能である。RSV，口語訳が新共同訳と同じ理解を示す。これに対してもう一つの解釈は文語訳「すみやか」や *Tanakh, NASB, Rosenthal*⁵⁾ “urgent”に見られる。筆者はすぐ次の16節のダニエルの王に対する要求の内容に鑑み，後者に与したい。

ダニ 2:16

“ダニエルは王のもとに行って，願った。「しばらくの時をいただけますなら，解釈いたします。」”

16節冒頭には接続詞 *w*^e があり，ここは場面が変わるところなので訳出が必要。しかしもっと大きな問題はダニエルが願った内容が直接話法になっている点である。原文は16節後半は *di* で導かれ，3人称未完了〈猶予を与える〉と，不定詞句〈その解釈を王に告げる〉となっている。つまり間接話法が直接話法で訳出されているのである。これは余りに乱暴なやり方ではないだろうか。私訳は，〈そこでダニエルは参内し，彼が王にその解釈を告げられるよう，しばらくの猶予を王に願い出た。〉となる。口語訳も大きな問題はな

い。つまり、こんな大胆な変更を加える程の必然性が全くないのである。

ダニ 2:18

“そして、他のバビロンの賢者と共に殺されることのないよう、天の神に憐れみを願い、その夢の秘密を求めて祈った。”

この訳文を読む限り、“天の神に憐れみを願い”“祈った”のはダニエルである。しかし18節前半の動詞は不定詞であり、文法上は17節末の動詞 *hōda*^c の支配を受けるので、ダニエルが彼の仲間に〈憐れみを請うよう〉求めたのであるから、主語はダニエルの仲間である。あるいは口語訳のようにダニエル自身をも含めることも事実としては可能だろう。また原語には“夢の”はないし、“祈った”という動詞もない。この節の後半は *di* に導かれ、結果、目的を示す。ここでも、〈彼らが殺す〉(3人称複数形)相手の〈ダニエルとその仲間〉が脱落している。訳文では、ダニエルだけが殺されるという意味にも取られかねない。このように、この18節の訳文は、構文と、それを構成する一つ一つの表現が、日本語にほとんど再現されていない最悪のケースと言えよう。

ダニ 2:20 訳文省略

20節“こう祈った”は以下の内容を祈りと理解しての訳だろうが、原文は口語訳のように、「ダニエルは言った」(2つの動詞を使用)である。20節の“神の御名をたたえよ”は受動表現だから〈神の御名がたたえられますように〉が正確。

ダニ 2:25a

“おそるおそる”

原語の *hitb^hhālā* は *hitp^{ec}el* 形の不定詞だから、口語訳の「急いで」の方が適訳だろう。この形はほかに3:24と6:20にも現れるのでここでそれらを見ると、3:24では“急に”，6:20では“急いで”と問題なく訳されている。

この種の間違いをなくさない限り、新共同訳に基づくコンコルダンスは全く意味をなさないどころか、かえって読者を混乱に導くだろう。

ダニ 2:25b

“王様に解釈を申し上げると言っております。”

この文全体は *di* に導かれており、独立させて、原文にない“と言っております”を付加するよりは、口語訳のように関係詞表現を用いて訳す方法で十分なのではなかろうか。

ダニ 2:26b

“わたしの見た夢を言い当て、それを解釈してくれると言うのか。”

ここでは原文でわざわざ *kāhēl* 〈可能〉が使用され、王がダニエルの能力を問うている以上、〈できる〉という訳語が是非必要な箇所。それと一つの動詞が“言い当て”と“(解釈) してくれる”と二つの動詞表現に分割されてしまっている。口語訳「あなたはわたしが見た夢と、その解き明かしとをわたしに知らせることができるのか。」に何の不足があろうか。あるいは *Tanakh* のように、「本当にできるのか。」と副詞を添えることによって、*kāhēl* がより適切に再現できよう。

ダニ 2:28aβ の一部

“将来”

この語は預言文学で多用されるヘブライ語から出た術語で、文字通りには〈末の日〉、〈終りの日〉。31 節以下の夢の内容から判断しても、漠然とした“将来”よりも、もう少し原語の語義を生かした訳語の選択が望まれる。口語訳「後の日」参照。ダニエル書では 10:14 (ヘブライ語部分) にもこの術語が使用されているが、新共同訳ではやはり“将来”の訳語が当てられている。29 節にも“将来”の訳語が使われているが、ここにはそれに該当する語は一切なく、翻訳上、補充されたもの。その直前の“先々のこと”が *'ah'arē d'nā*

〈この後〉の訳語（口語訳参照）。この語は45節では“引き続き”の訳語が当てられている。

ダニ 2:29-30 訳文省略

29節は、31節、37節同様、“王様”という呼格を含む表現 *'ant malkâ* で始まっているので、31節、37節にならう訳が望ましい。冒頭の *'ant* (casus pendens) は30節冒頭の *(wa)'anâ* (casus pendens) と対をなしており、この文体を生かす工夫が必要なところ。英訳 NASB の冒頭訳²⁹“As for you, O King,”³⁰“But as for me”を参照。29節後半“神は秘密を明かし”は〈秘密を明かされる方が起こるべきことをあなたに知らせた〉であって、事実上は確かに“神”かも知れないが、神は原語にない。30節では、〈申し上げ〉、〈お助けするため〉と「わたし」の関与が強く訳出されているが、原文では前者は非人称で〈解釈が王に知らされ〉であり、後者は2人称で〈あなたの心の思いをあなたが知るため〉となって、「わたし」は可能な限り背後に退けられている。30節前半で「わたし」の功績を極力否定したと相応じている。宮廷内の慙懃な雰囲気を想像させる箇所であり、それを翻訳に反映させる努力が必要ではないだろうか。

ダニ 2:31

“王様、あなたは一つの像を御覧になりました。それは巨大で、異常に輝き、あなたの前に立ち、見るも恐ろしいものでした。”

ここはマソラの句読法を無視してその全体の意味を省略を交えて訳出した箇所。逐語訳を示すと、〈王様、あなたは（夢を）見ていました。すると見よ、一つの大きな像が（現れました）。その像は巨大で、異常に輝き、あなたの前に立ち、その容貌は恐ろしいものでした。〉となる（傍線は省略部分）。32節冒頭の“それは”も〈その像は〉となっており、訳文上の工夫かも知れないが、粗雑な感じを与える。

ダニ 2:34-35 訳文省略

訳された一つ一つの文が何の脈絡もなしに並列されているが、文脈を示す語を訳出した方が適切な箇所。34 節冒頭の“見ておられると”は 31 節〈(夢を) 見ていました〉が繰り返されているので、〈更にあなたが見ておられると〉と一語付加することで、夢の継続が明示される。35 節冒頭は原文に *bē'dain* があり、前節の原因に対する結果が内容となっているので、〈すると〉と訳出が必要。35 節後半は接続詞 *wē* で導入されており、内容は前半と逆説的につながっているため、〈しかし〉と訳出すると全体の文脈が明らかとなる。

ダニ 2:36

“これが王様の御覧になった夢です。さて、その解釈をいたしましょう。”

ここは文章構造、マソラの句読法を無視して訳出した箇所。逐語訳すると、〈これがその夢です。さて、私たちはその解釈を御前でいたしましょう。〉となる。1 人称複数形は唐突だが、前置詞 *q^odom* の使用とともに、王に対する婉曲な尊敬表現であろう。

ダニ 3:2aβ

“その他諸州の高官たち”

総督を始めとするペルシアの高官たちが列挙された最後に挙げられているのがこれ。もう少し正確には「諸州のすべての高官たち」。3 節でも同じ。

ダニ 3:2bβ

“自分の建てた”

ここと 3aβ “その王の建てた” と省略した訳が与えられているが、原文では〈ネブカドネツァル王が建てた〉が忠実に繰り返されている。又、3bβ では新共同訳は全く省略してしまっているが、正確には〈ネブカドネツァルが建てた〉(像)。最後のケースは本文批評上、付加の可能性が BHS の脚注に示唆

されているが、註を付けずに訳すのであれば、やはり忠実に再現すべきではないだろうか。確かに原文は冗長ではあるが、その冗長さを訳者が勝手に変更してよいものだろうか。

ダニ 3:5aβ

“などあらゆる楽器による音楽”

六種類の楽器が列挙された後に続く箇所。正確には〈及びあらゆる種類の音楽〉で、新共同訳のように、列挙された楽器を含めた器楽の総称ではないだろう。全体は、〈角笛、……風琴の音^ねやあらゆる種類の音楽〉となる。7, 10, 15 節も同じ。

ダニ 3:7

“それで、角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴の音楽が聞こえてくると、諸国、諸族、諸言語の人々は皆ひれ伏し、ネブカドネツァル王の建てた金の像を拝んだ。”

5 節で列挙された楽器のうち、ここでは最後の「風琴」が原文にはないが、5aβ で指摘した〈及びあらゆる種類の音楽〉は原文にはある。新共同訳はこれを脱落させている。又、7 節前半の主語は「すべての諸国民」であり、後半の主語が「諸国、諸族、諸言語の人々」だが、新共同訳は前半の主語を訳出せず、後半の主語を節全体の主語にしている。

ダニ 3:11a

“そうしなければ”

ここも原文はもっと具体的に、〈そしてひれ伏し拝まない者は誰でも〉となっている。原文が冗長ならば、その冗長さも再現すべきではなからうか。

ダニ 3:12ba

“この人々は御命令を無視して”

逐語訳を試みると、〈これらの人々は、ああ王様（何とも恐しいことですが）あなたに対して敬意を払わず〉となる。真ん中にある〈ああ王様〉という呼格は、「王に対して敬意を払わない」などという言葉をお口にすることも憚られるという臣下の気持ちの表われであろう。ここはずっと2人称で王に向かって語られており、次の“王様の神に任えず”は〈あなたの神に仕えず〉の方が正確。しかし、日本語表現としては、王に向かって「あなた」というより「王様」と3人称的に言う方が、尊敬の念も込められ、自然だということならば、新共同訳のままでよいのかも知れない。

ダニ 3:13aa (一部)

“ネブカドネツァル王”

以下何回かネブカドネツァルが王の称号なしに言及されるが3:3 (上述), 13, 14, 16 (呼格), 19, 26, 28; 5:18 では、新共同訳はすべて「王」の称号を付加している。原文に王がなく、新共同訳も称号なしに正しく訳出している箇所は4:1 (自称), 30, 31 (自称), 34 (自称), 5:2。そのほか、次の14節では、原文の「ネブカドネツァル」が、単に“王”で、3:24では「ネブカドネツァル」を脱落させ、「王」だけを訳出。原文ではこれら称号のあるなし、固有名詞で言及するか、称号だけで言及するか、それなりに文脈の中で一定の役割を果たしている。それを余りに恣意的に訳者が取括選択してよいものかどうか、疑問を提出しておきたい。13節b冒頭“この三人は”は、原文では〈これらの男たちは〉。

ダニ 3:16a

“……はネブカドネツァル王に答えた。”

ここは呼格「ネブカドネツァル」を地の文に混入させてしまった例。マソラの句読法が無視されている。新共同訳のような読み替えがBHS脚注で提案されているが、先の英訳聖書(RSV, Tanakh, NASB)はいずれもマソラに従っている。マソラ通りに読めば、前半の地の文は〈王に答えて言った。〉で

あり、後半の引用文が呼格〈ああ、ネブカドネツァルよ〉で始まる。王に称号もつけずに呼びかけ、しかもその答えは、彼らの神に対する絶対の信頼、王が求める偶像崇拝を峻拒するという内容であった。次節で王が、“血相を変えて怒”った様子が目に浮かぶ。このように、彼らの返答の形式、内容ともに王の激怒を増幅させ、又、信仰に基づいて王の命令をも敢然と拒否するダニエルたちの姿勢を強調することによって、両者のコントラストを明確に描出するマソラ伝承は、この深刻な場面にユーモアさえ漂わせている。伝承本文の根拠のない合理化は避けるべきである。

ダニ 3:21a

“彼らは上着、下着、帽子、その他の衣服を着けたまま縛られ”

主語は正確には〈これらの男たちは〉と明示されている。“上着”，“下着”。“帽子”の三語はどれもペルシア語ないしアッカド語に起源を有する文化語。Rosenthal に従えば⁶⁾、これら三語は順に〈ズボン〉，〈上着〉，〈帽子〉となる (NASB がこれを採用)。

ダニ 3:24b [一部]

“あの三人の男は、縛ったまま炉に投げ込んだはずではなかったか。”

文脈から特定できる主語は極力省くのがこの新共同訳の一つの特徴と思われるが、ここでは、主語が「お前たち」か「われわれ」かが特定できないケース。原文は後者。主語を明示して、「三人の男」を目的格に訳出した方が日本語としてすっきりする。“はず”は余計。

ダニ 3:25a [一部]

“自由に”

前節の王の問いは〈縛ったまま投げ込んだのではなかったか〉であり、この節では四人の男たちが〈縛られずに〉歩き回っている光景に対する王の驚き。もちろん、両節で使われているそれぞれの該当語の動詞の語根は異なる

し、又、〈縛られずに〉は一步進めば“自由に”となるかも知れないが、もう少し原語の語義と文脈を尊重して訳すべきであろう。

ダニ 4:15

“聖なる神の霊”

14節までの詩文では、“いと高き神”は単数だが、この15節の散文では複数で、〈聖なる神々の霊〉。単数、複数の区別を日本語でどれだけ再現すべきかの問題はあるが、ここでは王が、ダニエルらの神について正確には理解できていない場面であり、複数表現が必要な箇所であろう。

ダニ 4:16a

“しかし、ベルテシャツァルと呼ばれるダニエルは驚いた様子で、しばらくの間思い悩んでいた。”

ここもマソラの句読法が無視され、“しばらくの間”が“思い悩”む行為への副詞句となっている。口語訳「しばらくのあいだ驚き、思い悩んだので」(19節)の方が正確。二つの動詞は完了と未完了の連続で、後者はこの場合、行為の継続を含意する。

ダニ 4:16ba

“王は彼に、「ベルテシャツァル、この夢とその解釈を恐れずに言うがよい」と言った。”

この地の文は〈王は言葉を続けた〉で“彼に”は原文にない。言った内容のうち、“恐れずに言うがよい”は、論理的には結局そういうことになるとは言えても、結果を先取りして訳出したようなもので、余り正確な訳とは言えない。直接法ではなく願望法(jussive)が用いられており、逐語訳をすると〈その夢とその解釈がお前を思い悩ますことのないように〉となろう。口語訳(19節)は可成り忠実な訳であることがわかる。結局、この先、新共同訳のように“恐れずに言うがよい”まで王の言いたい結論を直載に訳出する程の裁

量権が翻訳者にあるのかどうかは、議論が分かれるところであろう。

ダニ 4:16bβ-

“彼は答えた。「王様、この夢があなたの敵に、その解釈があなたを憎む者にふりかかりますように。」”

この地の文の主語は「ベルテシャツァル」と明記されており、訳出が必要。文脈から勿論わかることだが、しかし、目的語を付加したり、固有名詞を代名詞に勝手に変更したりすることは望ましいことではない。さてそのベルテシャツァルの返答の内容だが、冒頭の呼格“王様”は、21節同様、〈わたしの主君〉が原語で「王」という言葉はない。口語訳（19節）の「わが主よ」が正確。その次の原文は動詞がなく、前置詞句による假定願望。〈その夢はあなたの敵のもの、その解釈はあなたの憎むもの〉（にかかわることならよいのだが）となっている。新共同訳のこの箇所は、筆者には口語訳のように二つの動詞を使用するよりは好ましく思える。

ダニ 4:17-18 [訳文省略]

ここは8-9節の詩文が散文の形で引用されている箇所。但し完全に同一ではなく、多少の表現の変更が見られる。8節の“地の果てから”はよいが17節では“果て”が原文にはないにも拘らず、繰り返し訳出されている。9節と18節では、“野の獣は宿り”，“鳥は巢を作る”とやはり同一の訳語が現れるが、原文はそれぞれ異なる表現をしている。“巢を作る”と訳出された二つの動詞の原意は、〈住む〉であり、筆者は、「鳥が住む」とは即ち「営巢」のことだとこの訳語には感心したが、それなら二つの異なる動詞を「巢を作る」と「巢を営む」とでも訳し分けるのはどうだろうか。

ダニ 4:20 [部分, 訳文省略]

天使の語った“この木を切り倒せ”以下，“七つの時を過ぎさせよ”までは引用符が必要。11節から13節までの部分引用。原文は詩文としての形では

伝えられていないが、*Tanakh* のように、詩文に戻して訳すことも可能であろう。

21 節以下、これまでの批判が該当する箇所がいくつかあるが、紙幅の都合で省略し、先を急ぐことにする。

ダニ 5:1b

“みんなで酒を飲んでいた。”

もっと正確には〈彼はその千人の前で酒を飲んでいた〉であって、もっと王に関心が集中した叙述になっている。

ダニ 5:2 [訳文省略]

新共同訳の“宴も進んだころ”も、口語訳の「酒が進んだとき」も、大宴会全体の雰囲気述べているように思われるが、1 節に対する批判同様、これも王の行動として述べられた表現で、逐語訳としては〈酒の影響で〉となる。〈酔った勢いで〉とでも訳せようか。ここで金銀の祭具から酒を飲んだのは、“王や貴族、後宮の女たち”だけではなく、〈彼の妻たち〉も原文には列挙されているが、新共同訳では脱落している。“後宮の女たち”という表現は、妻妾ともに含むということか、あるいはこういう事実の存在をやわらげて表現したものなのだろうか。次節も同じ。

ダニ 5:3

“そこで、エルサレムの神殿から奪って来た金銀の祭具が運び込まれ、王や貴族、後宮の女たちがそれで酒を飲み始めた。”

ここの“エルサレムの神殿”の原語は、前節の同じ訳語のそれとは異なる。この問題は前稿 129-130 頁で取り扱ったのでその指摘を参照。“金銀の祭具”の“銀”は、ここの原文にはない。70 人訳にならい、前節と合致させたものか。この場合、確かに「金銀」の方が主観的には正しく見えるが、マソラ伝承も聖書翻訳の歴史もそのような修正を拒んできた (*NASB, Tanakh*,

文語訳参照)。RSVは“金銀の祭具”と訳し、脚註で原文には「金」しかないことを明示している。我が国の聖書翻訳の歴史は文語訳以来、このような脚註を一切拒んできた。聖書翻訳に関する限り、これは頑迷固陋な悪習に外ならない。本文がかかえている問題を読者に提供するのも翻訳者の任務の一つではないだろうか。3節後半冒頭（訳文では末尾）の“飲み始めた”は単に〈飲んだ〉の方が正確であり、“酒を”も原文にはない（2節も同じ）。

ダニエル 5:4 [訳文省略]

冒頭の「こうして」は原文にない語。原文にある *bē'dain, 'd̄ain, (u)k'e'an, w'e* などを訳さなかったり、何も無いところに付加したり、新共同訳の訳者が文脈を新たに創作している感が否めない。“木や石”の後へ“など”を付加したのは、列挙された素材以外でできた神々があるということなのだろうか。7節でも“星占い師”の後に“など”が付加されている。

ダニエル 5:6a

“王は恐怖にかられて顔色が変わり”

この節の冒頭は *'d̄ain* で始まっているが訳出されていない。原文は“顔色が変わり”が先で、“恐怖にかられて”と訳出された部分が後。後者の表現は4:16にも出てきたが、そこでは“思い悩んでいた”と訳されていた。この方が適切だし、二つの表現の順番を変更する根拠もない。私訳を試みると、〈そこで王は顔色が変わり、思い乱れた〉となる。ただし、全く同一の表現ではないが9節では順番が6aとは逆になっているので、新共同訳でよいのだが、副詞の“いよいよ”は、6節からの継続を強調する翻訳者の解釈だろうか⁷⁾。

ダニエル 5:11aβ

“父王様の代に、その人はすばらしい才能、神々のような知恵を示したものでございます。”

“父王様”は原文では“お父上”のみ。逆に12節の“父王様”は“王様”

のみ。一つ一つの言葉がマソラ学者によって如何に大事に伝承されてきたかを思うとき、新共同訳は余りに言葉を軽々しく操作していないだろうか。次の“すばらしい才能、神々のような知恵”についても同断。原文では名詞が三つ並列されているが、前二者が“すばらしい才能”に縮約されてしまっている。*hendiadys* はここでは問題外。従ってここでは、〈才気、聡明、および神々の知恵のような知恵〉のように、三語を並べて訳すべきであろう。14節についても同断。最後の“知恵”に関しては、新共同訳のように“神々のような知恵”に縮約するか、前置詞 *ke* をもう少し具体的に“神々の知恵に比肩すべき知恵”とでも敷衍するのは、選択の問題であろう。

ダニ 5:12b [一部]

“その字の解釈”

“その字”は原文にない。文脈から解釈の対称は5節以下の〈文字〉であることは十分わかる。*Tanakh* は“その字”を挿入しているが付加と明示している。逆に15節では原文の〈その言葉の解釈を告げること〉という表現をたった一語“それ”で片付けてしまっている。意味が伝わらないとは思わないが、翻訳というより梗概を読んでいるような錯覚さえ覚える。

ダニ 5:18

“王様、いと高き神は、あなたの父ネブカドネツァル王に王国と権勢と威光をお与えになりました。

ここでも“ネブカドネツァル王”の王は原文にない。いと高き神がこのネブカドネツァルに与えたものは原文では四つ列挙されているが、ここには三つしか挙げられていない。この章の11節 aβ でも同じ問題に出会ったが、不注意なのか、意図的なのか判断に苦しむ。しかし、6章8節に列挙された王の高官のうち、総督の次に列挙された“地方長官、側近ら”は原文では《側近と地方長官》という順序になっている。この種の不注意による誤りに入るだろうが、4章33節の“貴族や側近”も、正確には“側近や貴族”。5章23

節の“金や銀”も同断。

ダニ 6:7a

“王のもとに集まって”

翻訳だけを読んでいれば、この文の主語は5節の“大臣や総督”だと確かにわかる。しかし原文の逐語訳は〈その時、これらの大臣や総督は王の下へ集まり〉となる。6節の“彼ら”も原文では〈これらの男たち〉である。こういう訳し方が聖書の翻訳に適しいのかどうか、筆者は大いに疑問を感じる。

ダニ 6:11

“ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた。”

原文の構造理解が難しい節だが、新共同訳は微妙に原文から離れているように見える。冒頭は、10節のダレイオス王の行為を受けて、〈一方、ダニエルは〉で始まっている。今までも出てきたが、この種の冒頭の接続詞 *wē* は〈ところで〉とか〈一方〉とかの訳語を付すと前節との文脈関係が明らかとなる。次の *kēdī* に導かれる従属文は〈(その)書面が署名されたことを知った時〉で、主語の「王」を明示しない受動表現であり、*kēdī* は逆接表示ではなく、〈……した時〉、〈……するや否や〉の意味。又、「禁令」ではなく「書面」。主節は〈彼は彼の家へ入った〉。11節の *αβ* は NASB が括弧を付して訳しているように、説明的挿入で〈ところでその二階の部屋にはエルサレム方面に向けて開かれた窓があった〉の意味であろう。11節後半の始めのところの *hū'* はそのままの形で直前の *bēyômā'* に関連させ、次の *bārek* を *pa^{cc}el pf.* と取ると、〈そしてその日三度、彼はひざまずき……〉となる⁸⁾。BHS は脚注でいくつかの写本に基づき、*hū'* を *h^wā* と読み替えることを提案しており、新共同訳はこれを採用したものであろう。このように本文の読み替えをした場合は、そのことを註記する必要があるだろう。11節全体の試訳は〈一方ダニエル

は、書面が署名されたことを知った時、彼の家に入った。ところでその二階の部屋にはエルサレム方面に向いて開かれた窓があった。そしてその日三度、以前に行っていたように、自分の神の前にひざまずき、祈り、賛美した」となる。アラム語本文そのものは、ダニエルが窓から見える所で「ひざまずき、祈り、賛美した」ことを明示していないが、次節からそのことは十分うかがえる。そのことを考慮すると、新共同訳の“窓ぎわにひざまずき……”という部分は親切な訳かも知れない。

ダニ 6:19aβ

“側女も近寄らせず

この“側女”と訳された語 *dah^awān* の語義は正確にはわからないが、日本では文語訳以来、口語訳を経て新共同訳に至るまで、一貫してこの種の解釈をとってきた⁹⁾。先に参照した英訳聖書に目を転じると、RSV “no diversions were brought to him” (v. 18), NASB “and no entertainment was brought before him” (v. 18), Tanakh “no diversions were brought to him” と、もう少し別様の理解が示されている。具体的には音楽の演奏や歌舞の上演が考えられよう。文語訳以来の伝統にこだわる根拠があるのだろうか¹⁰⁾。

以上でダニエル書アラム語部分の翻訳批評を終えたい。紙幅の都合もあり、またこれまで批評してきた内容と重なることもあり、第六章以下は、特に目立つ箇所だけを取り上げたに過ぎない。これまで気づいた点をメモしてきたものを、今回このような形にまとめてみて、筆者は始める以前よりも一層複雑な気持ちに陥っている。筆者が批評の俎上にのぼせた作品は、エキュメニカル運動の一環として、プロテスタントとカトリックの学者が共同して翻訳事業を行い、日本聖書協会が発行したものである。又、この翻訳は、教会の礼拝用としても用いられるよう企画されたと聞いている¹¹⁾。更に、学校教育の場でも、この新共同訳を採用している学校が着実に増えている¹²⁾。つまりこれからの多くの若い世代は新共同訳聖書によって育ってくると言っ

も過言ではないだろう。われわれが検討したのは、聖書全体のうち、ほんのわずかなアラム語部分だけにしか過ぎないがその聖書の翻訳の出来がこんなものであって良いのだろうか、という思いが去来している。

筆者は新共同訳でも口語訳でも、マソラ学者が伝えた、句読法をも含めた伝承本文が、できうる限り正確に日本語に訳出されることを願っている。そのような願いとは裏腹に、これまで、見てきたように新共同訳は、マソラの句読法を無視したり、文頭の接読詞等を取捨選択して文脈を作り変えたり、又、個々の語義、語法の解釈においても、余りにも多くの初歩的な誤りを犯しているのである。そのような見方は翻訳観、翻訳方針の違いに基づくものもあろう。しかしそういった相違に基づく場合を除いても、筆者はこの翻訳作品はできうる限り早急に改訳が試みられるべきである、と確信するに至った。伝承されてきた一語一語は決して疎かにされてはならないからである。最後にこの翻訳批評が将来の改訳に資することを願いつつ、二回に亘る聖書アラム語部分の翻訳批評を一先ず終えることにしたい¹³⁾。

註

- 1) 拙稿『聖書 新共同訳』アラム語部分の翻訳批評(1) 東京女子大学紀要「論集」第43巻第2号(1993年3月), 123-147頁。
- 2) J. W. Wesseliuss, "Language and Style in Biblical Aramaic: Observations on the Unity of Daniel II-VI." VT 38 (1988), 194-209.
- 3) Ibid., 198.
- 4) Ibid., 199. 彼の訳は以下の通り。
There is not a man on earth who can meet the king's demand; to such a degree that no great and powerful king has asked such a thing of any magician or enchanter or Chaldean the thing that the king asks is difficult, and none can show it to the king except the gods, whose dwelling is not with flesh.
- 5) F. Rosenthal, *A Grammar of Biblical Aramaic* (1961), pp. 46, 84.
- 6) Ibid., p. 59.
- 7) NASB がこの立場をとっている。そこでは, "Then King Belshazzar was greatly alarmed, his face grew *even* paler, and ……"と訳されているが, その後半は〈彼の顔面は尚一層蒼白となった〉の意味だろう。しかしNASBは註を付加して, 原意は〈顔色が変わった〉としかかないことを明示している。
- 8) この解釈は A. S. van der Woude, "Zu Daniel 6, 11" (ZAW 106, 1 [1994]), pp. 123 f.

- 9) 文語訳「^{みめたち}嬪等」, 口語訳「そばめたち」.
- 10) *NEB* とその改訂版 *REB* “no woman was brought to him” (v. 18) が日本語訳と同一の理解に立つ. しかし *NRSV* は “no food was brought to him” と訳す.
- 11) 遠藤周作「心しみる祈りへ努力結実」(朝日新聞 1987 年 9 月 10 日夕刊) での木田献一の引用参照.
- 12) キリスト教学校教育同盟の行なったアンケートによれば, 解答を寄せた約 150 校 (中高一貫校が一つの解答を寄せた場合はこれを一つと数え, また大学が学部別に解答を寄せた場合は各学部を一つとして数えた) のうち, 19 校のみが新共同訳の採用予定なしと答えている. 1988 年度より採用が始まり, 1993 年度までに実に 100 校を超える学校が採用を決定したのである. このアンケートの集計は「キリスト教学校教育」367-371 号 (1993 年 3 月~7 月) に掲載されている. この 367 号 3 頁の見出し「新共同訳聖書」の使用をの「を」は, 余り明確ではないが, 筆者には, あたかもキリスト教学校教育同盟が, 新共同訳の使用を推進しているかの如くに読めた. 真意がどこにあるのか, 疑問を提出しておきたい.
- 13) 改訳の提案を試みたついでに, 今後の聖書改訳のあるべき方向について言及しておきたい. プロテスタント系教会では, 新改訳聖書を用いる教派を別にすれば 1955 年発行の口語訳聖書の使用が主流を占めてきた. 今回の翻訳批評を行う際, すべての箇所ではないが, 口語訳をも原文との比較で検討してみたが, 新共同訳と比べるならば, 筆者にはアラム語部分に関する限り, 全体として口語訳の方が原文に忠実な翻訳を行っており, 正確さの点でも高く評価すべきだとの印象を得た. 従ってこの口語訳を改訳する方向が一つ. その際, 当然, 旧約聖書に関する限り, *BHS* の章節を採用すること, 小見出しの採用の是非についても検討すること, 従来 of 固有名詞, 祭儀用語の適否の検討, などが事前になされるべき課題となろう. もう一つの方向が, 新共同訳の誤訳の除去. 両方とも, どのような翻訳方針を採用するかによって, 方向は大きく異なってくるであろうが, それぞれの特色が生かされれば十分, 両者は共存可能となろう. 従来 of 日本 of 教会では, 礼拝で使用する聖書を特定するのが慣行となっている. 例えば, 新改訳と口語訳は二者択一 of 関係にあり, 互いに他を排除してきたと言えよう. それは神学的に理由のないことではない. しかし, 新共同訳 of 登場は, 従来 of 教会 of 聖書 of 選択方法に一石を投ずるものとなった. 口語訳を採用してきた教会にとって, もはや神学的障害を云々することは許されない. つまり, これかあれかという選択方法だけではなく, 両者を同時に使用するという選択方法も可能になったのである. 従って, 新共同訳か, 口語訳かという二者択一ばかりではなく, 個人的にお好きな方をどうぞ, という選択肢も加わったのである. 筆者は後者 of 立場が好ましいと考えているので, 新共同訳と口語訳 of 共存を望んでいる. 複数 of 翻訳聖書 of 共存, 礼拝 of 同時使用は, 聖書理解を妨げるものではなく, より深い聖書理解を可能にするであろう. 筆者はアメリカ留学中, 北部長老派 of 教会に所属していたが, 毎週 of 礼拝 of 聖書朗読では, 子供から老人まで of 担当者がそれぞれ, 自分 of 好み of 聖書を朗読していた. *KJV* から *TEV* まで実 to 様々な聖書が朗読されたが, 筆者 of ような外国人でも決して混乱することはなかった. むしろ, 教会設置 of *RSV* と of 比較により, 聖書 of より深い理解が可能となった. 筆者はこのような経験に鑑み, 日本 of 教会でも複数 of 聖書 of 使用が可能になっていく状態を切望している. そのような日 of 到来を願い, 新共同訳と口語訳それぞれが, よりよいものになることを希望して筆を擱く.